

防災教育・復興教育推進事業（いわての復興教育スクール）成果報告書

学校名：岩手県立久慈東高等学校

I 取組の概要

東日本大震災時、本校では3月11日に帰宅困難生徒13名が学校に宿泊し、さらに12日には本校格技場に約70名の市民が避難してきた。また、本年は台風10号により地域は甚大な被害をうけた。これらの経験を踏まえ、沿岸部の高校に通学する生徒として、災害発生時に自らの安全を守ることに加え、高校生として地域への支援で何ができるのかを考えさせた。また、自然災害への理解や危険回避、災害時の対応についての学習を通し、防災意識の向上を図った。

1 具体的な取り組み**(1) 台風10号復興ボランティア**

台風10号による暴風雨は県北地域に甚大な被害をもたらした。久慈市内でも商店街を中心に壊滅的な被害状況であった。本校も二日間の臨時休校を余儀なくされた。このような状況の中、本校生徒の多くが復興の一助になりたいと志願し、休日を利用してボランティア活動を行った。多くは汚泥を掻き出すなどの地味で根気のいる作業であった。9月の1ヶ月間で延べ約200名の生徒が自主的に参加した。

**(2) 東日本大震災復興ボランティア****ア 第1回ボランティア**

(5/20 グリーンピア三陸宮古仮設団地 53名参加)

昨年度からの継続で今回が3度目となる。3年次の食物系列、介護福祉系列、情報ビジネス系列の生徒が訪問した。久慈地方の郷土料理であるまめぶを作って振る舞ったり、押し花作りに一緒に取り組んだりして利用者との交流を図った。

イ 第2回ボランティア

(8/26 グリーンピア三陸宮古仮設団地 40名参加)
進路活動が本番となる3年次に代わり、2年次に交流が引き継がれた。折り紙箸袋やポチ袋作り、スタンドグラス作りなどを一緒に取り組んだ。介護福祉系列の生徒は、授業で身につけたセラピューテックケアを行った。食物系列の生徒は、田老地区の行事食に関して聞き取り調査を行った。

ウ 第3回ボランティア

(12/16 グリーンピア三陸宮古仮設団地 34名参加)

前回は初めての交流で緊張気味だった生徒たちも今回はたいぶ打ち解けた様子で、リース作り、カルトナーージュ作り、セラピューテックケアを行い、交流を深めた。

**(3) 防災意識を高める取り組み****ア 介護福祉系列「防災講話」**

山田高校教諭小笠原潤氏を講師に招き、「TSUNAMI（津波）は世界共通語～地域に根ざした防災・減災について～」の演題で講演を行った。小笠原先生自身の東日本大震災での体験や教員海外研修で派遣されたインドネシアでの経験など具体的な内容で、防災の重要性について示唆に富んだ講演であった。

イ 避難訓練 第1回(6/29) 第2回(12/2)

2回とも地震からの火災を想定したものだったが、1回目は教科担任が誘導、2回目はHR担任が誘導と条件を変えて行った。また、避難経路を一部見直し、より安全性を高める努力を行った。

ウ 地元企業見学会(12/2 管内企業各社)

1年次生が2年次に所属する系列に分かれ、管内の企業を見学した。

エ 救命救急講習会(12/26)

自らの命を守り抜く力と共助の精神を持つ防災担い手を育成するため、久慈広域連合消防本部から救急隊員を講師に招いて救命講習会を実施。



II 取組の成果と課題

1 台風10号復興ボランティア

前期末考査を一週間後に控えた8月29日からの暴風雨は、県北地方の生活を一変させた。6年前の東日本大震災を彷彿とさせる被害状況は、これが昨日までの久慈市なのか、と目を疑う悲惨な状況であった。道路は寸断され、商店街は壊滅的な状況であった。このような中、本校生徒は状況を正確に認識した上で対応し、考査を受験するなど日常生活をしっかりと過ごしていた。

考査後、3年生は就職試験が始まるなど進路へ向けた活動が本格化し、1、2年生は部活動の新人大会が迫る中、土曜、日曜を復興のためのボランティア活動にあてる生徒が200名を超した。普段、引っ込み思案な生徒が多い本校の生徒ではあるが、地域の災害を自分のことと捉えて、その復興に役立ちたいと考え、自発的に行動したことはこれまでの防災・復興教育の大きな成果と言える。特に、泥水を厭わず、明るく作業に取り組んでいる本校女子生徒は多くの市民から賞賛された。「地域に根ざし夢を拓き 未来を育む」という本校の教育目標が、着実に生徒へ浸透していることがうかがわれる活動であった。災害時に限らず、地域の中心となり、その発展に貢献する中で自己実現を図ることができる生徒の育成が今後の大きな課題である。



2 東日本大震災復興ボランティア

年3回、グリーンピア三陸宮古仮設団地にある田老サポートセンターでのボランティア活動を実施した。

介護福祉系列と食物系列の生徒が中心となった。介護福祉系列の生徒は施設での介護実習を、食物系列の生徒は食の匠との実習を行っており、地域のお

年寄りと接する機会はそれなりにあるのだが、やはり初回はぎこちない交流であった。しかし回が進むにつれて、気心が知れ、心からの交流が行われていた。本校の文化祭を訪れていただいた方もおり、世代を超えた交流にやりがいを感じ、卒業後も訪れたいと考える生徒もいた。そのような中、自分たちが何かするだけではなく、人生の先輩としてお年寄りから学ぼうとする態度が芽生えたことは大きな収穫であった。このような交流が一過性のものでなく、長期的・継続的に行われ、本校の多くの生徒が関わるものにしていくことが今後の課題である。



3 防災意識を高める取り組み

避難訓練を年間2度行い、防災意識を高めることで、いざという時に適切に対処できるように計画している。生徒は訓練の必要性を認識してしっかりと取り組んでいた。避難後の消火訓練や救助袋を利用した緊急避難訓練に対しても積極的に参加した。避難経路を一部見直すなど、防災に対して常に意識を高める努力をした。防災に対し形骸化しないよう常に問題意識を持って取り組むことが今後の課題である。

また、いざという時は自らが防災や復興の主体となる、という意識を持たせることが大切である。その意味で防災講話や救命救急講習会はしっかりと知識を持ち、行動できる生徒を育成する上で有意義であった。



本年度の台風10号による被害に見るように、災害は全く予期しないときに突然やってきて、私たちの生活を破壊する。そのような非常時に強い郷土愛を持って、地域の復興・発展へ向けて周囲をリードし主体的に取り組む人材の育成することが、本校の責務である。